

(春まき)ナタネの種まきが 始まりました～♪♪

「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」

いよいよスタート !!

2007年4月13日、放射能汚染地ナロジチ地区で、
土壌浄化を目的としたナタネの種まき作業が行われ、5
年計画である「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」は、
その記念すべき1年目がスタートしました。

その2日前の4月11日には、シトーミル農業生態学
大学のディードゥフさん他の研究者、ナロジチの農業技
師コロミエツさんたちが、「救援・中部」キエフ駐在員竹



〈土壌のサンプル採取を行う〉

内高明さんも立ち会う中で、すでに耕された予定地(4ha)の土壌サンプル採取、実験栽培のための区
画割作業を行い、その後、現地作業員たちによる肥料散布などが進められていました。

日本の支援者の皆さんも、「ナロジチの大地一面に、黄色い菜の花が咲き誇る風景」を、想像されるの
ではないでしょうか？ 今年の現地の気温にもよりますが、開花は早ければ6下旬、ナタネの収穫は7
～8月頃でしょう。

さらなるご協力を！——プロジェクト資金集め

ところで、「今、私たちのなすべきことは？」…それは、言うまでもなく「資金集め」です。報告会・
バザーなどいろいろな企画を通して市民に訴えようと、ただ今、「救援・中部」の運営委員は奔走してい
ます。11月10日には、チャリティ・コンサートを名古屋で準備中です。そして、「ボランティア貯金」
などのいろいろな基金に対し、助成金の申請作業も精力的に進めています。

しかし、何よりも、「チェルノブイリの被災者に心を寄せてくださる、皆様一人ひとりの心により、ナ
ロジチの人たちが励まされ、放射能で汚染されてしまった大地を甦らせる力になれば」と思います。ナ
ロジチの大地が再び生命を育む力を取り戻し、被災者の人々の健康が改善され、彼らに笑顔が戻るこ
を願って、さらに訴えていきたいと思ひます。(戸村京子)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10
チェルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代
 郵便振替：00880-7-108610
 TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)
 ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

2007年度 総会&チェル救デーのお知らせ

日時：6月23日(土)
午後1時30分～4時30分まで(予定)
場所：あいちNPO交流プラザ 会議室C
Tel 052-961-8100
名古屋市中区三の丸三丁目2番1号 県東大手庁舎
(地下鉄名城線 市役所下車2番出口 東へ徒歩3分)
13:30～14:30 第一部 総会
14:30～15:30 第二部 チェル救デー
「菜の花プロジェクト」ナロジチ現地情報の紹介
パネル展示
15:45～16:30 茶話会 お気軽にお出かけください。

2006年度 事業報告

06年度は、「チェルノブイリ原発事故から20周年」ということもあり、多くのマスコミにも取りあげられ、各地でチェルノブイリ関連企画が展開された。

私達「救援・中部」も、スタディ・ツアーを行い、いくつもの企画に参加・協力、あるいは主催をし、広く人々に「チェルノブイリを忘れないで!」と訴えかけてきた。それら一連の広報・活動が功を奏したのか、06年度収入は、前年度より350万円の増額となった。

以下に、06年度の活動を報告する。

A. 被災者およびその家族を救援する事業

前年度の活動を継承して、①医療機関支援事業 ②保健事業(ミルク支援) ③被災者団体等支援事業 ④文通・クリスマスカード事業 ⑤奨学金事業…を行った。①に関しては、主にナロジチ地区病院・診療所が対象であった。また、③に関しては、被災者が民間健康保険制度に加入することを促し、私達の支援は、保険では取得できない、特別な医薬品を提供する方針へと転換した。⑤の奨学金事業は、06年度をもって、新規奨学生の採用を終了し、現在奨学金支給を受けている在籍奨学生への支援継続のみとした。

B. 事故の被災地復興のための事業

具体的には、ナロジチ地区ボロトヌィツァ村とセレツ村の、水道工事費支援を行った。チェル救の資金提供は、経費の3分の1。残りは、ナロジチ行政の自助努力で資金調達された。また、06年9月より始動した「チェルノブイリ ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」は、06年度中に3回の現地調査を実施。「国立シトーミル農業生態学大学」「ナロジチ地区行政・同地区住民」「ホステージ基金」と、協議・実地調査を行い、次年度4月からの実施準備に入った。これらは、特別事業として報告する。

また、当会会計には属さないが、現地カウンターパートである「ホステージ基金」が主体となって助成申請した「草の根・人間の安全保障無償資金協力」をサポートし、結核罹病率の高いナロジチ地区の中央病院に対するレントゲン装置設置と、20ヶ所にのぼるナロジチ地区診療所に対する「医療機器整備支援」(総額約750万円)の交付が決定された。

2007年度 事業計画

上記の06年度事業報告にある①～⑤は、07年度も継続する。③の被災者団体等支援事業に関しては、「ホステージ基金」とともに、「民間健康保険」加入状況と効果の評価を行い、支援の実効性向上と効率化を図っていくこととする。

何よりも特記すべきは、新規事業として06年9月より始動した「チェルノブイリ ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」についてである。「被曝・病気・貧困・切捨て」の地…ナロジチで、今なお暮らし続ける人々への「希望」となるプロジェクトを、今年度の主要事業に据えた。具体的には、8ページの「連載57」を参照していただきたい。07年度は、「播種・収穫・放射能測定・分析・バイオディーゼル燃料(BDF)装置設計・国内組み立て・BDF装置現地輸送」を行う予定である。

なお、BDF組み立て時には、現地から担当技術者を招聘して研修を行い、現地での適正かつスムーズな実施に備える。国内事業は、新規事業資金獲得のため、機関誌「ポレーシェ」による広報はもちろんのこと、各種助成金申請、チャリティ・コンサート、各種イベントへの参加など、広くPR活動を行う。(山盛)

4月22日「チェルノブイリから21年in名古屋」

YWCAにて／講演後記

第一部は、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクトの意義」と題して、チェル救の河田さんが、これまでの活動報告と「菜の花プロジェクト」に取り組むに至った経過、春まきが2・3日前に終わった現況を、現地の写真を示しながら詳しく説明されました。続いて原さんは、バイオディーゼル燃料・メタンガスの説明をレジメに基づいて、「伊那谷 菜の花楽舎」の経験を踏まえて、ナロジチ現地でもこのプロジェクトが可能である事を、強調されました。特筆すべきは、一夜漬 (!?) で作られたバイオガス発生「模型」を使いながらの解り易い説明。質疑応答では、参加者から鋭い質問もあり、興味の高さに驚かされました。(→「菜の花便り」参照)



第二部は、「チェルノブイリ事故被災者の今」で、子ども基金・佐々木さんの報告です。最初にサフチツ・ナタリアさんの紹介と挨拶、「彼女も、現在甲状腺癌を患っており、体力に無理が利かない。日本からの里親制度に感謝している」旨を述べられ、連日の日程で、かなり体力を消耗しているため退席されました。続いて、1人1人里子の写真を示して、子ども達の病状・医療環境の現状・家族状況等が生々しく報告されました。多くの方々が、チェルノブイリ惨禍に、違った側面から係わっておられることに、改めて脱帽。当日の参加者は50名程でしたが、真剣なまなざしとカンパをいただき、「菜の花プロジェクト」へ大きく背を押していただいた1日でした。(神谷俊尚) * * * * *



今、病気に苦しみ悩む人たちに医療器具や薬を送る支援に加え、もう1つ視点を深くした「菜の花プロジェクト」という、「生命の土台の、汚染された土地を浄化しよう」という構想を聞いた時は、くたびれていたハートがふくらんでトキメキました。ウクライナの大地の中、4ヘクタールという小さな実験地からの出発。広やかな未来が開けることを、願わずにはいられません。原さんのバイオエネルギープラントの話は、台所で徹夜で作ったという透明プラスチック容器の模型を使っただけの説明があり、エタノール製造の流れが見えておもしろかった！「チェルノブイリ子ども基金」の招きで、ベラルーシから来日したS.ナタリアさんは、事故の半年後に生まれた20歳の女性です。小学生の時うけた甲状腺手術のこと、その前夜の恐怖について、などを話してくれました。病院には、同年代の病気の仲間が大勢いて驚いたこと、悩みを分かち合う友人がたくさんできたことなど。「手術後は、薬を一生飲み続けなければなりません、費用を日本からの援助で賄え大変感謝しています。」と、見るからに疲労の表情で話してくれました。疲れていた彼女は10分ほどで退席し、同行の通訳の佐々木真理さんから、ベラルーシの被災者を訪問した話を聞きました。「小さな一人ひとりの善意が、誰かの生きる力を支えているのだ」と、改めて感銘しました。(東区 伊藤しづ子)

「菜の花便り」その1

「4月13日、春まきナタネをまいたと、ナロジチから報告がありました。いよいよスタートです。それを受け、今回から定期的に進捗状況を皆さんに報告していきます。しかし、栄えある第一回は、宮腰さんにお任せする(7ページ参照)として、4月22日の講演会での、質疑応答についてお伝えします。

Q1. 「種皮にあるセシウムやストロンチウムは、なぜ菜種油に混入しないのでしょうか？」

【水と油は混ざらない】聞けば誰でもが、うなづくことでした。土中の水分に溶けて植物に吸い上げられた、放射性物質であるCs137とSr90は、水溶性のため油には溶けません。植物体・種皮に含まれても、ナタネ油には含まれないのです。これは本当に「目から鱗」、思わず覚醒しました。

Q2. 「現地作業員の二次被曝は、どのように防護しますか？」

常時マスクを着け、放射能を吸い込まないように防ぎます。また、作業員は定期的に病院で線量チェックを受け、健康管理をします。

Q3. 「メタンガス化のあと、残材処分はどうするのでしょうか？」

濃縮された汚泥は、低レベル放射性廃棄物として、現地で指定された場所に厳重管理されます。

このように河田さんの答えは明快で、それは「十分に練られたプロジェクトである」ということを参加者に納得させるものでした。(榎本恭子)

草の根支援の近況報告 と 静岡サレジオ小学校提供の診療所用自転車

昨年12月23日に、静岡サレジオ小学校で行われたクリスマス会では、ナロジチ地区の診療所で働く医師や看護師の、往診用の自転車を買うための寄付金10万円をいただきました。ナロジチ地区には、20ヶ所の診療所があります。そして、各診療所が管轄する範囲はとても広いので、自転車さえあれば、緊急時はもちろん、往診にかかる時間が大いに短縮でき、毎日の巡回診療も増えます。このプレゼントは、ナロジチ地区の住民に、たいへん喜ばれることでしょう。

去る2月28日、在ウ日本大使館で「ナロジチ地区診療所医療機器整備の案件」の草の根支援署名式が行われ、20ヶ所の診療所と1ヶ所の地区病院に、33品目108点の機器（総額30万グリーブナ／約750万円相当）が提供されました。そして、「6月15日までに、提供機器と自転車を一緒に届け、診療所スタッフと一緒に現地で写真を撮る」と、キリチャンスキー氏から連絡がありました。

高級な自転車は、920グリーブナ（23,000円／台）もしますが、一般的なものは、350～370グリーブナ（8,750～9,250円／台）くらいで、これに荷台やライトなどをつけるともう少し高くなります。つまり、サレジオ小学校提供の資金で、8～9台は購入できそうです。

「近日中に、ジトーミル市の会議にナロジチ地区病院のテプリツキー院長が来るので、その折に提供先を相談する予定」とのことです。贈呈先の診療所は、管轄範囲の広さや使う人のこと（…あまり年配の医師などは、自転車は危ない…）などを考慮して決定します。今のところ、「ラトチャ村診療所」「スターレイ・ドログニ村診療所」「セレツ村診療所」は、ほぼ確定しているようです。（美）



〈ナロジチにて（招魂祭のお墓参り）〉

「六ヶ所村ラブソディー」豊橋で上映会

5月19日（土）、豊橋市民文化会館で「六ヶ所村ラブソディー」の上映会がありました。朝・昼・夜の3回。監督の鎌仲ひとみさんのトークつきです。豊橋でやろうと思いついたのはひとりの大学生、山口清之君。ピースボートの旅で知り合った仲間から紹介されたのが、鎌仲監督とこの映画だったそうです。インターネットなどでスタッフを募ったり、商店街に呼びかけてチケットやチラシを置かせてもらったりして、上映にこぎつけました。

当日、私は「菜の花プロジェクト」のチラシを折り込んでもらうために、朝一番に会場に行きました。15～6人のスタッフは、全員若者。椅子並べや折込みの手伝いをしながら、豊橋にもこういう若い力があるんだと、豊橋在住者としてちょっとうれしくなりました。チェル救からは、知多の榎本さんが駆けつけてくれました。榎本さんも私も、名古屋に次いで2度目の鑑賞でしたが、あらためてこの映画のすばらしさに心を打たれ、考えさせられました。

鎌仲さんの話では、もう200回を超える上映が行われているそうです。そして、ロコミで映画を広めた若者たちが、「花とハーブの里」で反核運動している菊川さんのところに、集って来るようになったといいます。（5月9日付け中日新聞夕刊に、このことが載っています。）豊橋の若者たちも、来る6月22日夏至の夜「電気を消してスローな夜を」をスローガンに、日本の全世界に相当する4,900万部の号外を配ろうという「TEEM GOGO! 2007」(<http://www.teamgogo.net>)「みんなでちょっと動けば変わる」活動をしています。

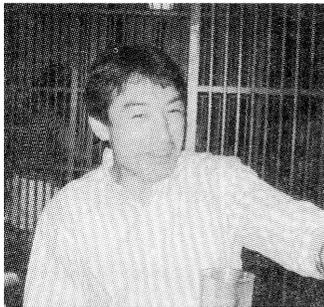
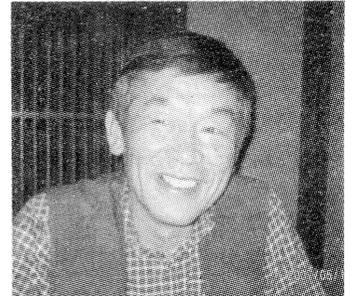
最後に、鎌仲さんからチェル救へメッセージ。

「菜の花プロジェクト」はすばらしい。感動しています。イラクにも菜の花を咲かせたい。ほかの上映会でも、「菜の花プロジェクト」のチラシを配るから送ってください…とのこと。ウクライナで実験が成功したら、劣化ウラン弾で汚染されたイラクやアフガニスタンにも広がるといいですね（橋本）

高校生にチェルノブイリを語る (伊那市 小牧崇)

救援活動に関わりだした頃、高校生は、チェルノブイリに関する最も反応の良い聞き手だった。日々のニュースに、「チェルノブイリ」がよく登場していた。とりわけ、汚染地帯における甲状腺ガンの多発など同世代の被害を聴くと、とても他人事とは思えなかっただろう。社会科の授業で話題にした翌日、研究室にいた私に5,000円のカンパを届けてくれた生徒がいた。後で聞くと、彼は夕食時に学校で聞いた話をして、一人千円のカンパを募ったのだそうだ(もちろん私は、自分の知っている事実を伝えたのであって、カンパを募ったわけではない)。こうした熱い反応は、その後徐々に少なくなっていくのだが…。

この5月、名古屋の椋山女学園高校から、「総合学習の一環として、2年生にチェルノブイリ救援の話をしてほしい」との依頼が、事務局経由で廻ってきた。最近、高校生に話しても反応はいま一つだったので不安はあったが、手元には、河田さん作の「救援・中部活動紹介」、榎本さん作の「菜の花プロジェクト紹介」、そして、連休中によく作ることができた自作の「ナロジチ紹介」と、三本のパワーポイント資料もあるし、どうにかなるだろうと引き受けることにした。当日、昼過ぎに会場到着。「話に臨場感が出るかもしれない」と思い持参する予定だった、放射能測定器を忘れたことに気付いたが、後の祭りである。各教室には、天井から備え付けのプロジェクターが下がり、いつでも映像資料が利用できる。羨ましい限りだ。昼食後の2時間、途中パワーポイントを利用しながら、「原子力発電と事故」について、「汚染地帯に暮らす人々と救援活動」について話した。話が散漫になってしまったため、夢の世界に突入してしまった生徒もいたが、多くはメモを取りながらよく聴いてくれた。生徒のレポートは、時間をかけてまとめ、いずれ送ってくれるとのこと。どんな評価が下されるのか心配な反面、届くのが楽しみでもある。



「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」が始まるにあたり

(昭和区 池田光司)

ナタネの種まきが終わり、いよいよ菜の花プロジェクトが始まりました。バイオディーゼル燃料(BDF)やバイオガスの、装置設計も始まりました。

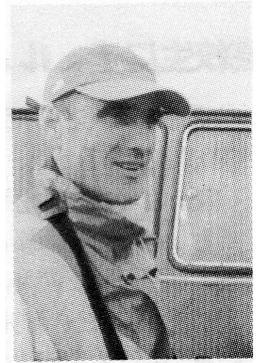
ところで、みなさんはこのプロジェクトに対してどんな夢を描いていますか？ 私はというと、「菜の花が咲いたところで、ナロジチの人々と杯を酌み交わせたらいいな」と、ぼんやりとした夢を描いている程度です。まだ、はっきりとした形では夢を描けていません。プロジェクトが始まった今、ナロジチ再生に向けて一人ひとりが具体的に夢を描き、それらの夢を、みんなで共有できる一つの夢へと育てていくことが、大切だと感じています。

放射能を扱うという性格上、ナタネの栽培・BDF・バイオガスの装置など、いずれも実験規模で始まりました。この実験が上手くいくかどうか、このプロジェクトの成否を大きく左右する一つの到達点であり、私の夢も、この到達点に対して描いていると言えます。しかし、ナロジチ再生こそがこのプロジェクトのゴールです。10年後、20年後、いや100年後に、このプロジェクトの成果が問われると思います。将来、規模が大きくなった時に、放射能の管理は上手くいくのか？ 暮らしの格差は生まれえないのか？ 菜の花は、ナロジチの人々の幸せの象徴となっているのか？…など、心配となることはたくさんあると思います。将来、ナロジチがどんな姿になっているのが望ましいのか、ナロジチの人々とこのプロジェクトに関わる人々が、一緒になって夢を描き、一人ひとりの夢を丹念に拾い上げてまとめていきたいですね。

このプロジェクトを進めるためには、まだまだ多くの課題があり、多才な人材が必要で、いろいろな役割が出てくると思います。みなさんとともに夢を描く中で、私が演じられる役割も見つけてくるのではないかと感じています。

「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の意義

地域生態学問題研究所所長・シトール農業生態学大学
助教授 N.ディードゥフ



原子力事故の影響の最小化の活動を含むいかなる活動も、人間の（社会の）幸福のために行われるものである場合に、またその場合にのみ、有意義なものとなるのである。

I. P. ローシ：『チェルノブイリ事故 15 周年・ウクライナにおける放射線被曝の保安』（キエフ 2001 年）

2007 年 4 月 26 日。チェルノブイリ原発 4 号炉が暴走し、破壊された原子炉から大量の放射性物質が放出され、次世代の生命に対する脅威の種が広大な領域にまき散らされてから、21 年が過ぎた。

チェルノブイリ惨事は、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアの、数十万の人々の運命に重大な影響を与えた。被災した地域の多くは、新しい経済的・社会的条件の下に置かれることとなった。チェルノブイリ原発事故の結果、最も深刻な生態学的・社会経済的打撃を受けたのは、ウクライナではシトール州北部の地域、とりわけナロジチ地区であった。

まず第一に、同地区は農業生産の発展した地域に属しており、農業が経済の主要部門の一つである。

第二に、住民の大半は村落部特有の食生活を送っており、村落部住民の被曝線量は都市部住民よりも多い。

第三に、地区内の広範囲の土地において放射能汚染の程度が非常に高いため、そこでの農業および採れた農産物消費の可能性は、除外されてしまうのである。ナロジチ地区では、今日 10,000ha 以上の耕地が、リハビリテーションの後、再度利用される可能性を持っている。

リハビリテーションの対象となり、経済活動を復活させ得る土地に対しては、従来の技術とは異なる、オルタナティブな加工用農作物栽培技術の使用を、提案することが可能である。

この意味で、国際社会とウクライナ政府により、汚染された土地のリハビリテーションの可能性（…汚染地を生産活動に復帰させる可能性）の問題が検討されている。現在、日本の NPO「チェルノブイリ救援・中部」のサポートを受けて、そのような土地の、最も魅力的かつ有効な利用法の一つが、シトール農業生態学大学の研究者たちにより開発されつつある。日本の専門家たちの協力を得て、チェルノブイリ原発事故の被災者たちの支援プロジェクトである「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の準備が、進んでいるのである。

プロジェクトの目的は、オルタナティブなエネルギー源（この場合はバイオディーゼル燃料）獲得のため、ナタネ栽培の有効性を検証することである。

土地をそのように利用することは、実質上住民の内部被曝線量を増加させることもなく、また、土壤中の放射性物質を、（放射線による外見上の障害は全くなしに）数十倍に濃縮して蓄積するという、植物としてのナタネの特性が、表土からの放射性物質の除去にプラスの影響を与え得る。

ウクライナで、または広く世界において、この問題の実地における開発は、まだほとんど行われていない。したがって、原発事故により汚染された農地で、バイオエネルギー生産の原料として、また土壌浄化のための天然吸着剤として、ナタネの特性を複合的に研究することは、科学的にもまた実践上でも、きわめてアクチュアルな意味を持っている。予定では、このプロジェクトの研究は、2007 年から 2012 年にかけての 5 年間行われることになっている。

上記のことをふまえ、プロジェクトの実施は、二つの方向を持って行われるものとする。

1. ナロジチ地区の条件下で、バイオエネルギー生産を目的として、ナタネの高い収穫率を上げる可能性を調査する。
2. ナタネによる、チェルノブイリ原発事故起源の Cs (セシウム) ¹³⁷ および Sr (ストロンチウム) ⁹⁰ の土壌からの吸着の程度を、鉬物肥料のさまざまな分量・割合に応じての変化を含めて調査する。

これらの課題の解決にあたって、望ましい結果が得られれば、それはナロジチ地区の汚染地域住民にとって、重要な社会的・人口動態学的安定要因として活用されるであろう。

また、使用を中止された土地が再び経済活動に組み込まれることは、この地域の復興に関心を持つ潜在的な投資家への重要なサインとなり得るし、被災した地域社会の気運を高めることにも貢献するであろう。

ナロジチ滞在記 (4/10~16)

(野洲市 宮腰吉郎)



【「菜の花プロジェクト」をビデオ撮影】——『いよいよ現地で「菜の花プロジェクト」が始動する』というので、仕事をやりくりしてウクライナ入りし、ナロジチに1週間ほど滞在してきました。今回の訪問目的は、まず

第一に「播種の様子を撮影すること」でしたが、この作業自体は一日で済んでしまう類のものなので、その後も現地に滞在して、プロジェクト進展前のナロジチの街や人々の様子も、撮影することにしました。

駐在員の竹内さんとともにナロジチ入りしたのは4月10日で、その後、11日に播種、12日に竹内さんはキエフに戻り、その日から私は一人滞在する、ということになりました。

【ナロジチ現地の作業】——11日、農大の緑色の車で現場の畑に到着。すでに、現場監督者や作業員の方々が来ていました。内部被曝対策として全員マスクを着用しているのですが、農大の人たちが白衣や使い古しのスキーウェアに帽子や使い捨てキャップを着用しているのに対して、現場の人たちや我々は普段着のまま。気休めに過ぎないとしても、この汚染度の土地ならこれぐらいすべしという指針、例えば、「土埃が付着しにくい、現場専用の装備を用意して着用する」とか、「土埃は、現場でできるだけ払っておく」など、具体的な指針があれば良いと思いました。結局、11日は手違いや機器の故障で作業が終わらず、播種はまた別の日に行くことになりました。

12日、竹内さんを見送った後、ナロジチ行政の非常事態問題課課長のユーラ（ユーリイ・ステパンチュク）さんと、飼料工場・学校をアポなし訪問。その後、ユーラさんが育ったマリエ・クレシという（今は一家族のみが住む）村に行きました。ここで、ご自身リクヴィダートルでもあるユーラさんのお父さんに、当時の様子を聞かせてもらいました。

【ナタネの播種】——13日の朝に、「播種は14日」という連絡があったため、自転車を借りてバザールに行き話を聞いたりしました。ハビニチ村に行った時のこと、農作業中の人たちを撮影させてもらおうとしたら、「やめてくれ」と言う。「俺たちはこうして働き、飯を食って、寝る。それだけの生活をしている。こんなところを撮影して、俺たちの生活を嘲笑するつもりなのだろう」ということでした。思いもよらない話で、こちらの意図を、拙いロシア語で必死に説明し、なんとか理解はしてくれましたが、撮影には抵抗があるようなのでやめました。その後、現場統括者のミーシャ（ミハイル・ネステルチュク）さんがやってきて、「今から行くぞ」と言う。急遽、今日播種を行うらしい。「暦の関係上14日を予定したが、施肥後の時間を考えると、やはり今日の方が良い」となったそうです。現場につくと、作業員の方々がスタンパっていて、「あとは種をまくだけ」という状態になっていました。もう18時で日が傾きかけていましたが、「30分ほどで終わる」というので、急いで撮影開始。2日前は雨が降った後だったので、土埃は立っていませんでしたが、この日は乾燥していて、おまけに風も強かったので、もうもうと土埃が舞っていました。作業中、コウノトリの群れが畑の生き物を探しに来たのか、畑に舞い降りてきました。「コウノトリは幸せを運ぶ」といいます。このプロジェクトの未来は、どうやら明るいようです。

【招魂祭に招かれて】——その後の3日間は、復活祭の1週間後に墓地で行われる招魂祭に招かれ、彼らとともに過ごしました。招魂祭の日は村によってずれているので、隣村のにも参加できるようです。招魂祭には、村を出た人も戻ってきて、ちょうど日本のお盆のようでした。

今回は、町をうろろろするだけでもと思っていましたが、特に竹内さんとユーラさんに大変お世話になり、トラブルなく滞在できました。カメラを構えていると、「何撮ってるんだ？」とまず聞かれ、「日本の団体の活動を追っている」というと納得してもらえ、さらに態度も好意的になる……ということも、何度も経験しました。それだけ、「チェルノブイリの活動がナロジチで信頼されている」ということなのでしょう。ただ、「菜の花プロジェクト」については、一般の人には、まだほとんど知られていないようです。町中で聞いた人の中で、たまたま一人だけ知ってる人がいましたが、ナロジチで農業関係の役職についている方でした。

「現地説明会の予定がある」とのことなので、現地の関心も徐々に高まっていくことでしょう。

連載 57 動き出した「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」

ナロジチの放射能汚染を減らす、新しいプロジェクトがいよいよ始まった。5年計画のこの事業は、汚染地域の人々に希望を与え、未来を開く可能性を秘めている。ますます深刻化する世界のエネルギー需要に、資源小国ウクライナのバイオエネルギーへの期待も大きい。地球温暖化対策をうたった新たな原発開発も聞こえてくるが、私達は、チェルノブイリのもたらしたものを決して忘れず、被災者救援のために可能な努力を続ける。



● 種まきは4月13日

ナロジチ地区スターレ・シャルノー村は、ナロジチ本町から少し東、チェルノブイリ原発寄りにある。汚染レベルは、Cs137で10~15キュリー/Km²。20年間放置されてきたこの原野に、4月13日、春まきナタネの播種が行われた。シトール農業生態学大学のディードゥフ教授指導のもと、同大学の研究者と現地住民が作業した。種まきには、日本人2名も参加し、ビデオ撮影を行った。またナタネの種類はBrassica napus (学名)、日本では西洋ナタネとして知られる。播種前には、分析用土壌サンプルを採取。Cs137を最も効率よくナタネが吸収できる栽培条件を調べるために、窒素肥料とリン酸肥料の様々な組み合わせで、肥料が施された。収穫後にナタネを分析すれば、セシウム吸収の最適条件が分かるはずである。ナタネ栽培前後の土壌、収穫したナタネの油・油粕・葉・莖・根のバイオマスなど、1年間に分析するサンプルは、800検体に上る。これだけ体系的なセシウム吸収試験は、世界でも類がない。結果は、学術的にも貴重な情報を提供するだろう。気候にもよるが、開花は早ければ6月下旬、収穫は7~8月の予定である。

● 秋まきナタネも実施

春まきナタネに加えて、秋まきナタネも栽培する。春秋合わせて4haである。秋まきの播種は、9月ごろの予定である。厳寒のナロジチでの冬季の凍結が心配だが、ディードゥフ教授によれば可能とのこと。生育期が長い秋まきの方が、種子の収穫量は多い。1ha当たり1~2トンの収穫を見込むが、目的は収量よりも放射能吸収であり、次年度の栽培条件は、今年の結果によって決める。

● 飛来したコウノトリ

種まき時の様子を撮影した写真を見ると、コウノトリがたくさん畑に舞いおりにいる。耕した地面で、虫やミミズを食べるためである。現地訪問時にコウノトリを見かけるが、これだけ群れているのは初めてである。幸せを運ぶコウノトリの訪問は、いささか嬉しくなるが、コウノトリが食べている虫やミミズもまた、放射能で汚染している。人間同様、食物連鎖の頂点に立つ鳥類は、汚染と被曝もまた大きい。我々の畑で食べる虫やミミズが、いつの日か安全になり、このプロジェクトがコウノトリにも幸せを運ぶ結果をもたらすよう期待したい。

● バイオディーゼル・プラントも始まる

次は、バイオディーゼル・プラントである。今年1月にナロジチを訪問した、伊那市の前澤 功氏が、すでにプラント設計を開始し、年内の「国内における仮組み立て」を目指す。現地の設置場所は、ナロジチ本町の西端にある「旧配合飼料工場」と決まった。工場とナタネ畑の距離は約7Kmあるが、輸送などには都合のよい場所である。ここに、バイオガス・プラントも設置する。工場用地とナタネ栽培畑は公有地であり、無償で提供される。プロジェクト全体の現地責任者は、ナロジチ区行政長のサブリュク氏。本人もナロジチ出身で、移住者の経験を持つ。「ナロジチ再生」に、情熱を持って取り組んでくれそうである。

資金は5年間で約4千万円かかる。皆様の支援をお願いしたい。
(河田)

竹内さんのウクライナ便り

日本でも報道されているかと思いますが、最高会議解散・総選挙を命じる大統領令が発令されてから、その法的正当性が憲法裁判所で延々と審議され続け、同裁判所の裁判官に対する、大統領陣営・首相陣営双方の「圧力・賄賂」攻撃が取り沙汰され、ついには大統領によって3名の裁判官が罷免。そして、同裁判所の判決を待たずして、選挙に関する大統領と首相の合意が成立したのが5月4日。それから2週間経つ現在も、選挙の日取りについての妥協が成立しないまま、最高会議は開店休業状態。

不安定な天気、4月が過ぎて、5月の初めにはなんと雪がちらつき、それでも5月半ば、日中30℃という真夏の陽気になり、路上にクヴァスというノン・アルコールの発酵飲料のタンク(車輪つきで、トラックが朝これを定位置まで引っ張って来、夕方にまた回収していく)が出現して、その傍らに開かれたパラソルの下におばさんが座り、タンクの蛇口をひねって道行く人たちに売っています。この飲み物の名前は、トルストイの小説を読んだ人なら記憶にあるかもしれませんが、色と泡立ちはややビールに似ており、しかしほんのりと甘く、私は夏場の喉の渇きをいやすのに時々利用しています。以前はガラスのコップを洗って使い回していましたが、いつからか、使い捨てのプラスチックのコップが使われるようになっており、コップの大きさが値段が変わります。200ccのものが、日本円で15円くらい。このクヴァス路上販売は、毎年5月から9月くらいまでで、大きなペットボトルを持ってきて入れてもらっている人も見かけます。

4月半ば、私は『「救援・中部」の「菜の花プロジェクト」が、地域住民に与える変化を映画に撮りたい』という宮腰さん(7ページ参照)とナロジチに行き、春まきナタネの播種準備作業に立ち会いましたが、風をさえぎる何物もない広大な畑(現在は、汚染が高いため、農業には使用されていない)に立つと、けっこう体が冷えてきました。しかし、ヒバリの声は近くで聞こえ、田んぼの真ん中にあった高校に自転車で通学していた頃、春先にヒバリが空でよちよち飛びながら鳴っていた



のを、20数年振りに思い出しました。ちょうど、このナロジチ滞在時に、「環境保護の日」というので、日本なら中学生の年齢の子ども達が、地区のいずれの森の一角で植樹をしていましたが、そこも第3ゾーン(任意移住区域)だということでした。いつもナロジチに行くたびに思うことですが、目に見えない汚染は目に見えないままで蓄積しており、一方、人の生活は人の生活として、一見他の地域と変わることなく続いている。その「相容れないはずのものの共存」に、軽いめまいのようなものを感じます。「戦時中」という状況と、少し似ているのかもしれないと想像します。

以前も書きましたが、こちらでは5月9日が対独戦の戦勝記念日で、私はこの日、2004年に当時パリにいたアレクシエーヴィチ氏から送っていただいた彼女の著書『戦争は女の顔をしていない』から、いくつかの証言を読むのを習慣にしています。この本は、ナチスとの戦争に志願して参戦した、旧ソ連の女性たちの証言を集めたもので、多くは当時まだ十代だった彼女たちが、職業軍人あるいは兵役経験を持った男性たちとは異なり、「平時」の感覚を持ったまま、いきなり殺戮と破壊の現場に入っていった、その記憶を生々しく語っています。人間自身が、必ずしもそれと気づくことなく、絶え間なく作り出している大規模な「非人間化」「非自然化」の状況下で、どのように「人間らしさ」「人としてのまともさ」を新しく見出し続け、それを保っていけるのか。頭に血を上らせないで、冷静にしかし意思疎通への希望と工夫をこめて手を差し伸べることが、どのようにすれば可能なのか。簡単に答えが出るはずのない問いかけに、忍耐強く取り組むこと自体が、未来への方向を見つけていくための姿勢なのではないかと思います。

(5月20日)

「救助をするのは、溺れている人自身で？」

—ナロジチ地区復興の諸問題— (先号の続き)

『ジトーミル州』2006. 11. 7 掲載記事抜粋]

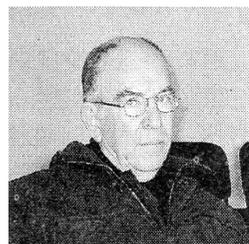
「チェルノブイリの人質たち」代表
V.キリチャンスキー

ナロジチ地区行政長サヴルク氏と、地区の抱えている焦眉の問題について話した。彼は、作成されているナロジチ地区復興計画について、熱っぽく説明した。ナタネ栽培ばかりでなく、多くのアイデアが含まれており、「発電所を復興すれば、職場もでき、ロズソヒフスケ村に活気が戻るでしょう。必要なのは資金です。隣国のベラルーシでは、国のチェルノブイリ関連プログラムが、大規模に実施されています。ウクライナでは、どうしてもすべてが言葉だけにとどまっているのか、理解できません…。我々はここで、本来不幸なわけでも、貧しいわけでもありません。私たち自身が、自分の問題を解決できます。必要なのは資金です。しかし、過去 10 年間、国がチェルノブイリ関連プログラムを削減する方針を採っているという時に、どこから資金を引き出せばいいのでしょうか？例えば、補償金の未払いの問題です。チェルノブイリ関連プログラムの未払い額は、2,900 万グリヴナに達しています。…住民の間で、社会的・心理的な緊張が高まるもう一つの原因となっているのは、健康状態の悪化、罹病率の増加と、医療業務の水準の低下です。過去 10 年間で、罹病率は 2 倍に増え、悪性腫瘍は 1.5 倍、健康な子どもは実質上一人もいません。状況をより困難にしているのは、医療スタッフの問題です。」

地区病院長テプリツキー氏の話聞いてみた。「ここ数年、超音波診断医・眼科医・小児科医・地域担当の内科医が欠員で、麻酔医・放射線専門医・内分泌専門医は、一人の医師が兼ねています。診療所等では、医療機器の 8 割が耐用年数を超えています。国の予算は、何の希望も与えてくれません。全ての子供達に保養をさせたいが、今年は 3 分の 1 も行けませんでした。地区行政はスポンサーを探し、92 人分の保養券を手に入れましたが、これは大海の一滴にすぎません。子ども達の食事については、お話しする気にもなれません。子ども 1 人あたり 3.4 グリヴナの手当金——どこからこんな数字が出てくるのでしょうか？ 食費手当でも、すでに 21,000 グリヴナが未払いにな

っています…」

ナロジチ地区では、「第 3・第 4 ゾーンでの村々のガス管敷設」「ナロジチ町の上水道の浄水と鉄分除去」「村落部での上水道の問題」が緊急のものとな



っている。「救援・中部」の支援金で、ポロトヌィツヤ村・セレツ村の上水補修工事は行われた。だが、他の村の工事は誰が行うのか？

最近、州議会の定例会議で、チェルノブイリ惨事により被災した住民の、社会保障の問題が検討された。州内の 9 地区に居住し、そこで働いている人々の問題が、ついに全面的に審議された。

チェルノブイリ関連のプログラムが常に縮小されており、残されている予算も、しばしば誤った用いられ方をしているという。予算の 90% は社会保障問題の解決に使われており、10% のみが、事故の影響対策に用いられている。だが、実際に求められているのは、その逆の比率なのだ。

私個人は、頻りに地区を訪れ地区のことをよく知っている人間として、「チェルノブイリ問題の解決に、明日からプラスの変化が生じる」と、うかつには信じることができない。特に、最も大きな被害を受けたナロジチ地区の発展プログラムに関して言えば、同地区を非常事態ゾーンと認定し、国を挙げて、救援の手を差し伸べるべきなのだ。

慈善基金「チェルノブイリの人質たち」は、「ナロジチの 1 グリヴナ」キャンペーンをスタートさせ、州議会はキャンペーンに賛同し、すでに 2006 年 7 月 14 日、すべての州民、企業・団体・銀行の役員に対するアピールを、満場一致で採択した。賛成の投票をし…そして、忘れ去ったのだ。州議会議員 95 名中、募金をしたのは 15 名であった。

当基金は、議員に手紙を送った。それに応えてくれたのは、州議会の「チェルノブイリ惨事の結果からの住民保護問題委員会」委員長のみであった。現在、学校の生徒たちが募金を集めており、農業大でもキャンペーンが始められている。

いかなる場合においても、まず第一に、我々は自分自身を助ける努力をしなければならぬ。問題解決のための第一歩は、私の考えでは、「ウクライナ内閣の出張閣議を、ナロジチ地区で行う」ことなのではないだろうか。

NPO法人 チェルノブイリ救援・中部 2006年度 収支報告書

(2006.04.01.~2007.03.31.)

収入の部		支出の部	
項 目	金額 (円)	項 目	金額 (円)
救援寄付金	7,202,322	事業費	9,116,352
個人 (610件) 4,942,158		医療機関支援事業費	1,057,750
団体 (47件) 2,260,164		医療機器提供事業	157,750
運営費関連寄付金	553,000	医薬品提供事業	900,000
個人 (67件) 528,000		保健事業費	380,000
団体 (3件) 25,000		粉ミルク提供事業	380,000
補助金		被災者団体等支援事業	1,100,000
地方公共団体交付金	258,000	業務委託費	500,000
民間助成金	4,400,000	奨学金事業費	1,417,455
雑収入	112,489	特別事業費	2,962,209
預金利息等	1,173	派遣費	0
現金過不足	0	駐在員費	300,000
		支援輸送費	453,264
		文通・クリスマスカード事業費	55,280
		海外監査費	0
		通信誌発行費用	890,394
		国内監査費	0
		キャンペーン	0
		広告宣伝費	0
		管理費	3,127,803
		給料手当	1,504,500
		荷造運賃	8,400
		印刷製本費	257,970
		旅費交通費	236,120
		会議費	3,600
		新聞図書費	18,520
		消耗品費	115,018
		修繕費	97,699
		水道光熱費	25,840
		支払手数料	98,701
		為替差損・両替手数料	3,495
		諸謝金	8,000
		諸会費	33,000
		雑費	32,000
		通信費	155,600
		租税公課	1,500
		地代家賃	527,840
当期収入合計	12,526,984	当期支出合計	12,244,155
		当期収支差額	282,829
前期繰越	8,550,413	次期繰越収支差額	8,833,242
収入総額	21,077,397	支出総額	21,077,397

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2007年 4月21日 監査人 南 和也 (印)

【会計報告】2006年度決算報告を、上記のように報告させていただきます。皆様の尊いご支援に支えられ、前期の繰越金額を上回って、次年度へ繰越す事ができました。また、当期より弥生会計による会計処理へ移行したため、収支報告書の勘定科目の表記は、弥生会計上の科目名に変更しています。(綾部)

事務局便り

会計年度(2007年)も新しくスタートして、あっという間に4月、5月と過ぎてきたような気がします。さわやかな新緑の季節とはいえ、急な温度差に戸惑う今日この頃です。4月は、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の広報活動として、各会場でのイベントに参加いたしました。そんな中、それぞれに、大きな反響をいただきました！ 熱いメッセージとご支援に、身の引き締まる思いです。またその一方で、助成金申請チームを組んで、助成金獲得に向けて日夜奮闘しているスタッフの熱意も伝わってきます。「今、目的に向かって、皆の気持ちがひとつになった!!」そんな感じがしています。まさに、活気に満ち満ちた空気が、事務所にいっぱいです！

さて、最近、そんな事務所へ通う道すがら、木々の緑に囲まれた住宅街を通ると、とあるお宅の庭先に咲いた、ローズマリーの可愛い小さなお花とそのハーブの香りに触れ、ふっと心が和み、優しい気持ちになったことがありました。しかし、世の中に目をやれば、さまざまな事件や事故に何か重いものを感じ、考えさせられることもあります。先日、ある講演で『疾病に対し“1に言葉、2に植物、3に化学製剤、最後にメス”というヨーロッパの諺がある』というお話を聞きました。この“1に言葉、2に植物”というのは、疾病に限らない…と、つくづく想いました。(綾部)

プロジェクトサポーターの大募集!!

ナロジチからナタネの発芽報告が待ち遠しい今日この頃。名古屋の事務局には、寄付のお申し出など、うれしいお知らせがいくつかあり、プロジェクトのスタートとともに、にわかに活気づいてきました。そこで皆さん、お気づきでしょうか？ ポレーシェに同封させていただきましたフルカラーの払込取扱票に！「ナロジチ再生・菜の花プロジェクトのちらしを読む」→「理解してくださる」→「郵便局に足を運んでくださる」…そんな方々のために、便利な払込票です。寄付は一口1,000円より、もちろん何口でもOKです。一人でも多くの方の温かい、さらに“熱い”ご協力を、なにとぞよろしくお願いいたします。

編集後記

☆日夜、M環境基金、B貯金、T財団…「プロジェクト助成金」申請が続き、今、申請燃え尽き症候群？
まだ結果は出ない…しかし頭の中はすでに計画でいっぱい…準備はあれこれ、燃え尽きてない？(京)
☆異国の地から帰ってきたTさんは、「本来無口だ」と言う。しかし、確かに編集作業は賑やかになったし、笑い声の回数も増えた気がする。自覚っていうのは、個人の基準があるんだあと、改めて気づいた。(美)
☆思いついたことを忘れないようにと、メモ用紙とペンが家の中の複数の場所に置いてあるのに、思いつくのはいつもお風呂に入っているとき。そしてメモをとれずに再び忘却の彼方に。(佳)
☆どのページも文字がギッシリ。読者の皆様には読みづらくて申し訳ないと思うが、その分、中味は濃い。寄稿者の熱い心が込められているからだ。次号はいよいよ100号記念版。乞うご期待！
そうそう、「911の嘘をくずせ(Loose Change)」もお忘れなく！ インターネット上に、日本語版ビデオが無料提供されている。すでに、アクセス50万回を突破!!(J)

—絶対おすすめの1冊！—

名木田恵子著 『レネット 金色の林檎』

(金の星社：1,260円)

チェルノブイリ原発の事故で被曝したベラルーシの少年を、里子としてひと夏預かった家族の物語です。

子どもの目から見たチェルノブイリの悲劇が、わかりやすい言葉で見事に描かれています。「20年以上経っても、被曝した人の健康は戻らない」という不条理が、切なく伝わってきます。チェルノブイリ後に生まれた世代に、ぜひ読んでもらいたいです。泣けますよ～(市原)



〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473